

疊語「花々」に関する三好達治の「雑記」

——語法の考察と新語に対する印象——

梅林 博人

一、はじめに

三好達治「雑記 言葉・その一」（『文学界』昭和二十四年三月号、五二～五四ページ）は、当時使われ始めていた「機関車たち」「花たち」「パイプたち」「花々」などの語句を「畸型語」と称し、続けて疊語法について自説を述べている（氏は「重語法」という。また、「〜たち」については「細叙するに興がつきたから今は略する。」としている。なお、引用に際し旧漢字を改めた。以下同様）。

雑記の題名「言葉」の下に括弧書きで「（或はさまざまな臆説）」と付記されているとはいえ、文人の発言だけあって示唆に富むと思われたので、ここに挙げて小見を述べてみることにしたい。

二、三好氏の発言1——語法の考察——

まず、「雑記 言葉・その一」から、疊語法に関わる部分を引用する。

家を家々といひ、村を村々といひ、国を国々、山を山々、人を人々、寺を寺々、といふが如き類の重語法は、なるほど一応複数をいひ表してゐる体ではあるが、それも実は副次的な結果であつて、語法の気味合ひは、家おのおの——家ごと、村おのおの——村ごと、以下国ごと、山ごと、人ごと、寺ごとを指すのがどうやら主眼の語気かと、私の耳にはききとられるがどうだらう。人々、我々の語はあつても、その人々我々のすぐ身边に見出される、牛にも馬に

も犬にも鶏にも、これを重語に用ふる語法はない。それのみでない、手にも足にも指にも、眼にも耳にも、重語なく、またそれに代る簡略な複数形もなささうだ。それらのものは、それらの一つ一つを指し示す、個性性をはつきりかかげてゐないからだらう。年々歳々津々浦々、これらの語は、指し示された一つ一つの語に、念をいれてゐるいひ方で、それらの総計を全体として、数の觀念に関連していひ表した語気ではない。

そこで私の臆説を結論していへば、重語法は複数形ではない、——少くとも、語法の主眼の上では、さうではない、といふことになる。種々、端々の語は不可なく通行しても、草々橋々の語は、同じ筆法で通行しまいというのである。「花々」「星々」は語法の根底に無理があつて、たやすく耳に熟しかねようといふのである。(五三―五四ページ。傍点は原文のママ)

ここに見られる疊語の解釈には、現在の研究に通ずるものがある。たとえば、万葉集の疊語を分析し、そこに『枚挙』性」と『総数』性」を見る蜂矢(一九七四)

は、〈夕々^{よいよい}〉について、「ヨヒヨヒゴト」という意味を持っていることがかなりはつきりと理解される」と述べ、やはり「〜ごと」という語をもつて説明をしている。また、「疊語複数は〈個性性を保った不特定多数〉を意味する」と述べる國廣(一九八〇)は、「疊語複数が用いられる場合はさらにそこに含まれる個体の〈個性性(individuality)〉がかなりはつきり意識されている」というように、やはり「個性性」という語をもつて説明をしている。

三好氏は「臆説だから論証はいつも不充分だし」と謙遜するが、文人の経験、語感に基づく論述はやはり傾聴に値する。

今日、疊語の研究は充実しているが、しかし、それを扱う論文の大半はここ五〇年に発表されたものである。その状況を考えると、諸論文よりも前に記されたこの文章は、雑記とはいえ、もう少し注目されてもよいのではないかと思われる(ただ、雑記というジャンルに収められているために検索は容易ではなく、それゆえ、これまであまり取りあげられなかったのではないかと思われる)。

三、三好氏の発言2 ―新語に対する印象―

ただ、こうした語法の考察のほかにもう一つ注目したのは、次の引用に見られるような新語に対する印象の記述である。

「機関車たち」の滑稽な擬人法「花々」の不快な語韻、この二つのものが一定の時間の後に、慣用の習慣から、我々の語感の神経にやがて今日の印象を削り落されて、いつこう差つかへのないものとして普通にうけいられる時期が来るだらうか、どうか。それが語感の退歩であるにしても、何にしても、とにかくさういふことになるだらうか、どうか。一方に必要があればこそ、このような畸型語が、目の前の事実として生起してゐるのであるが、必要は必ず常に、無制限に、感覚の拒否を乗越えて、領分をおしひろげてゆくものだらうか、どうか。それが願はしいことであるかどうかの、趣味上の問題は別としても、単に現象としても、それが果して可能であるか、どうか。

もしもそれが結局して不可能なら、万人の耳に通

行しないものなら、無用の混乱は予め避けるが賢明
といふものだ。（五三ページ、傍線引用者）

傍線以外にも、「耳ざはり」「閉口する」「かたくなな拒絶」「正気の沙汰では申すまい」「妙な造語」（五二―五三ページ）とあり、三好氏のこれらの新語に対する否定、批判は徹底している。

が、そうした抵抗もかなわず、現在では、「花々」は抵抗なく受けいれられているようであるし、「ゝたち」もますます多様な表現を生み出しているように見える（「花々」については、先日NHKBSプレミアム「ワイルドライフ」〈世界遺産 屋久島 伝説の巨大杉を探せ！〉でその語が複数回使用されたのを聞いている。また、「ゝたち」については、十五年ほど前にパピミラノ阪急グランドヒル店で「パンたち」という表現に出会って驚いた経験がある）。

だが、新語に対するこうした印象の記述は、言葉の変化を見ようとする立場からすると、貴重である。その語句がその当時、生きた表現、自然な表現として存在していたのかどうかを知る手がかりになるからである。

全集や索引、テキストデータが整備され、さらにコー

パスの開発・整備も進む今日では、ある表現の初出（いつごろから存在するのか）を探ることは、以前よりも容易になった。

しかし、実例が確認できたとしても、その表現がその当時どのように受け取られていたのかなどは容易には分らない。「普通にうけいれられ」ていたのかどうか、「万人の耳に通行し」ていたのかどうかは、こうした直接的な印象の表明がなければ推し量ることは難しい。今日の「花々」のように、違和感が小さくなってしまっているものについては、当初、これほどの抵抗感があったとは、なかなか想像が及ばないであろう。

そのように考えてみると、これほどかたくなに拒絶感を表明しているこの雑記は、貴重な資料だと思われるのである。

四、おわりに

方言の研究分野では、方言に対する印象やイメージの変遷を丁寧に見ること、研究を充実させている。たとえば、田中ゆかり（二〇一六）は、ヴァーチャル方言の背景には「『方言』を『価値あるもの』としてポジティ

ブに受容する時代」（ivページ）があることを、「方言撲滅運動」、「方言コンプレックス」、「方言は地方の宝」、「方言萌え」といった印象の変遷を交えて分かりやすく語っている。

こうした事例から、新語研究も、語句の変遷だけではなく、印象史やイメージ史が備わることによって研究がより充実したものになるのではないだろうか。技術の進歩で、实例のみならず、今回挙げたような雑記やコラムを見出すことも可能になってきているので、こうした情報を収集することも少し意識してみたい。

【参考文献】

- 安藤正次（一九三五）「疊音・疊語の一研究——特に Reduplicatio suffixa について——」藤岡博士功績記念會編『藤岡博士功績記念言語學論文集』岩波書店
- 飯間浩明（二〇〇三）『遊ぶ日本語 不思議な日本語』岩波書店（三一―三六ページ）
- 禹吳穎（二〇一五）「疊語の諸機能」『学習院大学人文科学論集24』学習院大学人文科学研究科
- 梅林博人（二〇〇五）「疊語形の使用について——『歌々』

を例にして―』『成城文芸』第一九二号 成城大学文学部

國廣哲彌（一九八〇）「総説」『日英語比較講座 第2巻 文法』大修館書店（一三―一四ページ）

佐竹秀雄（二〇〇二）「日本語に複数形はありますか？」『日本語学』第二二巻第一四号 明治書院（一月臨時増刊号 日本語あれこれ事典）

清水康行（一九九九）「日本語の数表現」『言語』第二八巻第一〇号 大修館書店

田中ゆかり（二〇一六）『方言萌え!? ―ヴァーチャル方言を読み解く』岩波ジュニア新書

玉村文郎（一九八六）「数詞・助数詞をめぐる」『日本語学』第五巻第八号 明治書院

田村泰男（一九九一）「現代日本語における畳語について―数概念からみた畳語―」『広島大学留学生センター紀要1』広島大学留学生センター

唐須教光（一九九二）「言語学的説明再考―日本語の畳語を例として」『藝文研究』六〇 慶應義塾大学藝文学会

蜂矢真郷（一九七四）「語の文法的構成―畳語について―」『萬葉』第八六号 萬葉学会、『国語重複語の

語構成論的研究』（一九九八年、塙書房）に所収、拙論では前者参照

山口明穂（二〇〇四）『日本語の論理―言葉に現れる思想』大修館書店（八―一七ページ）

（本学教授）